

何清漣著(中川友訳)“中国の闇——マフィア化する政治”扶桑社刊

反体制知識人のレッテルを貼られたため2001年にアメリカに出国、以来プリンストン大学などで学究生活を送りながら言論活動を展開している何清漣女史の上記著書を読了しました。噂に聞く中国の現状を理解する上で参考になると思うのでご紹介します。

要旨:

一言で云えば、中国では現状官がマフィア化して、或いは官がマフィアと結託して、官のみに許されている法律操作によって、農民の土地及び都市住民の土地を、無償乃至は考えられないほどに安い値段で取り上げ、その取り上げた土地を他に転売する事で暴利を貪っている。

彼等は出来るだけ早く、出来るだけ多くの中国の富を収奪し、アメリカをはじめとする海外にその富を移し、蓄積しようと遮二無二努力をしている。彼等の本心は一刻も早く、土地転がしによって蓄財し、彼等によってぼろぼろにされた中国におさらばしようと言うことなのだ。

彼等は彼等が去ったあとの中国がどのように荒廃し、どのような問題に悩まされるか等に関心はない連中なのだ。既に彼等高級幹部の多くは、子女を先遣隊として留学させたりしている。

中国では共産党独裁が徹底しており、官は共産党が独占している。計画を立てるのも、それを実行するのも、またそれを監査するのも全て官が実権を持っている。農民とか、都市住民と言った一般人民は、官のやることには一切抵抗できないと言うのが“共産”中国の実態なのだ。

特に最近その傾向が強くなってきている。かつて官のやることに批判的であったインテリと言われた人々も、官による締め付けに負けて、官とは戦わなくなってしまった。官は、今やナントカ反逆罪と言った規制を設けて、彼等が官の言うことを聞かない限り中国で生存できないように追い込んでいる。

外国の中国専門家と言われる人々も同様だ。中国政府の意向に従わない人々には、情報が流れないようになるなどして調査研究が出来ないようにするのが実態だ。訳者によると、官僚になって財をなすことは中国人にとって最高の愉楽であって、汚職役人が職権を乱用して私腹を肥やす腐敗現象は、中国の歴史の中ではありふれた光景であった。この腐敗現象は、毛沢東が睨みを利かせている間は影を潜め

ていたが、文化大革命後に登場したトショウヘイ政権の出現と共に再び見られるようになり、今世紀に入ってから土地転がしに集約され、凄まじいものになっているとのことである。

最近の経済面、政治面での国際的な力関係等から、これ程までに深刻な問題を抱えている中国に対して、残念ながらアメリカですら正面から批判できないと言うのが現状なのだ。

若干の感想:

かって石原慎太郎が、中国での腐敗とか犯罪などの実態について厳しいコメントをしているのを聞いたことがある。その時には、まさかそこまで酷いことはあるまいと思ったのだが、本書によると、中国の実態は聞きしに勝る酷さらしい。

最近日本の政界、官界の腐敗が問題にされているが、本書に紹介されている中国の腐敗に比べると、まだましと言う感じがしてくる。

以上